オンラインを利用した子どもの 日本語指導者・支援者育成の取り組み

――下関からの発信――

平　田　　歩
當　房　詠　子

要　旨

本稿は下関市でJSL児童生徒[1)]を対象とした日本語指導者・支援者育成の取り組みとして行った、日本語指導のオンライン研修の内容を報告し、この取り組みが下関地域でJSL児童生徒の日本語指導・支援[2)]として役立てられるかを検証する。（本研修は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、全てオンラインで実施した。）

キーワード：JSL児童生徒、山口県日本語教育、日本語指導・支援、オンライン

1. はじめに

現在、下関地域では日本語学校などに通わない外国人住民に地域で日本語指導できる環境が整っているとは言いがたい。地域の日本語教室は行政の運営ではなくボランティア団体に完全に委ねられており、数名の指導経験の長いボランティア講師も高齢化が進んでいる[3)]。その中でも、外国ルーツの子どもに日本語指導ができる人材は少なく、下関市教育委員会によると日本語指導員は2016年度に1名配置されたものの、翌年以来配置ゼロが続いているとのことで、小中学校に日本語指導が必要な児童生徒が在籍していても「日本語指導の経験者がいない」「指導時間が取れる教員がいない」「適切な教材がわからない」等の理由により日本語指導が行われないままのケースも多々あるという。

文部科学省の調査[4)]によると、全国的にも日本語指導が必要な外国ルーツの児童生徒[5)]は増加の一途をたどっており、山口県においても年々増え続けている。さらに来日する児童生徒も多様化[6)]し日本語指導については専門的な知識とスキルを身につけた指導員でなければ対応が難しくなってきている。生徒児童の状況にあった日本語指導と支援ができる人材の育成を行うことは、地域日本語教育を前進させることであり、地域の多文化共生に向けての第一歩だと考える。

そこで2019年度まで「日本語指導出前講座」として実施してきたものを、より実践的な内容

にし、「子どもの日本語指導オンライン研修」と題しJSL児童生徒への日本語指導・支援の方法について具体的に学べる研修を行うことにした。

２．子どもの日本語指導オンライン研修の概要

◇研修期間

〈第１次〉2020 年 10 月 1 日～ 2020 年 12 月 29 日

〈第２次〉2020 年 12 月 1 日～ 2021 年 2 月 28 日

◇実施方法

Zoomを使用したオンラインで行う。受講生は第１回～第３回までの講座を全て受講する。(一部、出前研修を実施。詳細は「３．研修内容」で後述)

◇講座の流れ

オリエンテーション（30 分）→【第１回事前課題】→【第１回研修（2 時間)】→【第２回事前課題】→【第２回研修（2 時間)】→【第３回事前課題】→【第３回研修（2 時間)】→レポート提出

◇対象・定員

教職退職者、現役の教職員、地域ボランティア、大学生で外国ルーツの子どもの日本語指導・支援に関心のある方(できれば、受講後の支援活動が可能な方)

１グループ　１～ 10 名以内

◇参加費　無料

◇受講生の内訳

「子どもの日本語指導オンライン研修」申込み（１８名）		
項目	団体数	人数
１．申し込みの形態		
個人（１名）		12
団体（複数人のグループ）	2	6
２．住まいの地域		
下関市内		7
山口県内で下関市以外の市町		10
その他		1
３．所属等		
学校教職員（現職）		4
教職退職者		1
日本語教師有資格者		4
地域日本語学習支援者（ボランティア等）		4
学生		0
その他		5
４．WEB会議システムZoomの使用について		
使ったことがない		4
使ったことはあるが、慣れていない		7
特に不安はない		7

2020/12/22

3. 研修内容

研修は 3 回に分けて行った。3 回とも事前に研修内容に関係のある資料や動画を見ておいてもらうという「事前課題」を課した。この「事前課題」に使用した資料、動画はJSL児童生徒のために誰もが無料で使用できるもの、居住地域に関係なく使用可能なものである。実際にJSL児童生徒を指導する場面で使用頻度の高いものを取り上げた。

オンラインでの研修は 1 回につき 2 時間（途中で 10 分程度の休憩を挟む）とした。教材や資料は画面共有しながら提示し、「やさしい日本語」[7]「DLA」[8] についてはJSL児童生徒と対面した場面を想定し、遠隔で活動をするなど、オンラインであってもできるだけ実践的な体験ができる機会を設けた。

また、現在JSL児童生徒に日本語指導・支援を行っている受講者には、すぐに使えそうな資料や参考図書なども紹介した。受講者がどのようにJSL児童生徒と関わっているか、どのような指導･支援ができそうなのかを聞き取りをしながら､その受講者に合う研修内容に微調整も行った。以下、第 1 回～第 3 回までの「事前課題」「研修内容」及び「参考図書」を示す。また、受講後に行った感想の集計と受講者の声も併せて示す。

【第１回】	
事前課題	1. 外国ルーツの子どもの現状がわかるニュース動画等、視聴 例）“日本の授業”を受けるため　外国籍の子どもを支える「にほんご教室」 香川・丸亀市（2019/06/19） https://www.youtube.com/watch?v=8-TuGvb6koE 2. 多言語多文化共生センター（東京外国語大学） ※サイト内およびリンク先を、閲覧・視聴しておいてください。 http://www.tufs.ac.jp/blog/ts/g/cemmer/dla.html 3. 愛知県「やさしい日本語」の手引き（PDFファイル／ 4.67MB） ※PDFファイルをダウンロードし、読んでおいてください。 https://www.pref.aichi.jp/soshiki/tabunka/0000059054.html
研修内容	1. 地域の現状についての理解 ・地域の外国ルーツの子どもの日本語指導の現状についてどの程度ご存じですか。 ・地域の現状を知るためにはどうしたらよいでしょうか。 ・日本語指導に関わるにあたって、知っておくべきことは何でしょうか。 ・資料「外国人児童生徒受入れの手引き」（2019年3月改訂） ・資料「外国ルーツの年少者への日本語指導について【事前調査事項】」 2. 「やさしい日本語」体験 ・「やさしい日本語」についてどの程度ご存じですか。 ・「やさしい日本語」を使ったことはありますか。 ・外国ルーツの子どもや保護者と関わるうえで、「やさしい日本語」はどのように活用できるでしょうか。 3. DLA体験 ・DLAについてどの程度ご存じですか。 ・DLAはどの時点でどのように使用すると効果的でしょうか。 ・実際にDLAを使ってみましょう。
参考図書	『多文化・多様性理解ハンドブック』松永典子著（金木犀舎） 『保育者のための外国人保護者支援の本』咲間まりこ監修（かもがわ出版） 『外国人児童生徒のための支援ガイドブック』齋藤ひろみ編者（凡人社） 『入門やさしい日本語』吉開章著（アスク出版） 『やさしい日本語表現事典』庵功雄編者（丸善出版） 『日本語でできる外国人児童生徒とのコミュニケーション』高嶋幸太著（学事出版） 『日本語でつたえるコツ』社会福祉法人　大阪ボランティア協会　WEB版

〈感想の集計〉

「子どもの日本語指導オンライン研修」第１回　感想（12名）		
No.	選択肢	回答数
1	**質問：WEB会議室システムZoomの使用について**	
	難しくて不安だった	1
	不安だったが、なんとかできた	3
	特に不安はなかった	8
2	**質問：地域の子どもの日本語指導の現状について**	
	知らないことが多かったが、知るきっかけになった	4
	少し知ってはいたが、より考えるきっかけになった	6
	よく知っているつもりだったが、さらに考えたいと思った	2
	よく知っていたので、特に新たな発見はなかった	0
3	**質問：「やさしい日本語」について**	
	知らないことが多かったが、知るきっかけになった	0
	少し知ってはいたが、より考えるきっかけになった	7
	よく知っているつもりだったが、さらに考えたいと思った	5
	よく知っていたので、特に新たな発見はなかった	0
4	**質問：DLAについて**	
	知らないことが多かったが、知るきっかけになった	9
	少し知ってはいたが、より考えるきっかけになった	2
	よく知っているつもりだったが、さらに考えたい（使ってみたい）と思った	1
	よく知っていたので、特に新たな発見はなかった	0

2020/12/19 現在

〈受講者の声〉

・「やさしい日本語」を再度勉強して、日本語教師としてのブラッシュアップに努めたいと思った。また、会社の同僚にも伝えて、外国人スタッフとの業務に役立ててもらいたいと思った。DLA は外国にルーツを持つ子どものみならず、職場で外国人スタッフの仕事に必要な言語の習得度合いを評価し、サポートしていることにも応用できると思った。

・対面式の日本語能力測定（DLA）は、児童・生徒・教師にとって、時間的、精神的負担がかかりにくそうでいいと思った。

・日本語指導の現状が現場任せで、外国にルーツを持つ児童が無支援のまま学校時代を過ごしてしまうことが有ると知りとても残念に思った。日本語指導に意欲があっても、「ニーズがないから、その（日本語支援員）配置はない。」と言われたことがあった。勉強がわからず、将来の進路選択の幅が狭められるのはつらいことである。経済的に安定した生活ができないと、新たな差別の火種を作りかねない。人権の立場からも、ニーズに合った日本語教育が望まれるのではないかと思った。

・子どもたちの日本語習得の状況をしっかりと把握する必要性がよく実感できた。国の資料をは

じめ、たくさんの良い資料があるが、県内ではなかなか活用されていないように思う。

第１回目の研修では、地域の現状を知ってもらうためにJSL児童生徒がどのような学校生活をおくっているのか、受け入れの状況、保護者との関わりなどについて紹介した。JSL児童生徒を受け入れた場合、学校はその保護者とどのようにコミュニケーションをとるのかということが問題になる。よく「その国の言語ができないから」「通訳がいないから」など学校側と保護者や子どもとの共通言語がないという不安を聞く。そこで本研修では「やさしい日本語」の利用を提案した。通常の日本語を「やさしい日本語」に置き換えるという作業は実際にやってみると容易なことではない。しかし、これができることで、保護者とも日本語だけでコミュニケーションを図ることが可能になる。

また、JSL児童生徒の日本語能力を正しく把握するためにDLAの使い方とその体験も行った。受講生の声からも、DLAが学習のサポートや日本語指導に役立つという理解が得られたことが分かる。

【第 2 回】	
事前課題	1. 文部科学省「かすたねっと」 ※サイト内を閲覧しておいてください。 https://casta-net.mext.go.jp/ 2. 東京都教育委員会＞日本語指導 ※サイト内を閲覧しておいてください。 https://www.kyoiku.metro.tokyo.lg.jp/school/document/japanese/ 3. こどもの日本語ライブラリ ※サイト内を閲覧・視聴しておいてください。 http://www.kodomo-kotoba.info/
研修内容	1. 初期指導の方法と留意点 ・外国ルーツの子どもが転入してきた場合、まず何から始めたらよいでしょうか。 ・日本語学習経験のない子どもに対する初期指導では、何から取り組むとよいでしょうか。 ・事前課題の内容から、気づいたこと、気になったことを話してください。 ・資料『事例参考型 子どもの日本語教育指導ハンドブック』北村弘明（双文社出版） 2. 教材紹介・使い方 ・子どもの日本語指導にはどんな教材があるでしょうか。 ・子どもが必要な日本語を習得するために、どんな教材があるといいでしょうか。 ・いくつか、教材を使ってみましょう。 3. 「かすたねっと」の活用方法 ・「かすたねっと」についてどの程度ご存じでしたか。 ・「かすたねっと」はどんなときに活用できるでしょうか。 ・実際に「かすたねっと」を使ってみましょう。
紹介した書籍	『日本語学級Ⅰ』大蔵守久著（凡人社） 『日本語学級Ⅱ』大蔵守久著（凡人社） 『マリアとケンのいっしょににほんご　学びにつながる 16 の活動』（出版停止中） 『中学生のにほんご　学校生活編』庵功雄監修（スリーエーネットワーク） 『中学生のにほんご　社会生活編』庵功雄監修（スリーエーネットワーク） 『おはなし推理ドリル』学研プラス 『日本語コミュニケーションゲーム 80』CAG の会編（The Japan Times）

〈感想の集計〉

「子どもの日本語指導オンライン研修」第２回　感想（６名）		
No.	選択肢	回答数
1	**質問：WEB会議室システムZoomの使用について**	
	難しくて不安だった	0
	不安だったが、なんとかできた	0
	特に不安はなかった	6
2	**質問：初期指導の方法と留意点について**	
	知らないことが多かったが、知るきっかけになった	3
	少し知ってはいたが、より考えるきっかけになった	3
	よく知っているつもりだったが、さらに考えたいと思った	0
	よく知っていたので、特に新たな発見はなかった	0
3	**質問：教材紹介と使い方について**	
	知らないことが多かったが、知るきっかけになった	2
	少し知ってはいたが、より考えるきっかけになった	4
	よく知っているつもりだったが、さらに考えたい（使ってみたい）と思った	0
	よく知っていたので、特に新たな発見はなかった	0
4	**質問：「かすたねっと」について**	
	知らないことが多かったが、知るきっかけになった	2
	少し知ってはいたが、より考えるきっかけになった	4
	よく知っているつもりだったが、さらに考えたい（使ってみたい）と思った	0
	よく知っていたので、特に新たな発見はなかった	0

2020/12/19 現在

〈受講者の声〉

・学習言語を習得するまでに７年もかかるとは想像以上だった。親の都合で日本に連れて来られた子どもは思っていた以上に苦労しているのだと思った。

・保護者向けの文書など、すぐ使えそうなので、日本語支援が必要な児童を受け持つ担任に知らせた。

・学習言語能力を習得することは、容易ではないと感じた。日本語を毎日１時間学習していっても、算数の内容まで１時間の中で学習することは難しく、日本語指導に使える時間が圧倒的に足りない。他の生徒が理解している算数の内容が、その子どもだけわからなくなっていることに危機感を感じる。このまま、次の学年を迎えてしまうと、どんどん算数がわからなくなるので、教員が日本語指導をできる時間数を増やしてもらえるよう、上司に頼んでいるところだが、教員の配置に関することなので、どうなるか、全くわからない状態である。

・以前、海外での義務教育修了の証明がなく、進学について困難な状況の外国ルーツの子どもがいた。そのような生徒への対策などがあったら、教えていただきたい。

第２回目の研修では、JSL児童生徒の初期指導と方法、留意点について紹介した。JSL児童生徒が転入してきたことを想定し、受け入れた学校としてあるいは担任としてまず何から始めたらいいのかと言うことを受講生に考えてもらい情報の共有を図った。

主な内容は、学校生活を送るために必要な日本語学習支援についてを、①学校生活を送るための日本語（指示を聞き取る、危険回避の表現、身の回りの物の名　等)、②友人関係を構築するための日本語（あいさつ、応答、呼びかけ、方言　等）③教科を学ぶための日本語（例:理科「～が～に変化しました」、算数「～は～より多いです」、国語「要旨をまとめましょう」等）の３つに絞って紹介した。これらを早い段階で身につけ、子どもが安全に楽しく学校生活を送り、学習ができるようにする必要がある。ここで重要な２つの言語能力とは、カミンズによるBICS（生活言語能力）とCALP（学習言語能力）である。BICSは日常生活の中で見聞きすることなどから自然に獲得する言語能力で習得は１～２年で比較的短期だとされている。一方CALPは正しい文法や認知的な思考を伴うため、言語を体系的に身につけておかないと獲得が難しく個人差はあるが一般的に習得には５～７年かかると言われている。

このようにJSL児童生徒の日本語指導には時間もかかり、支援に様々なツールも必要になる。これだけのことを学校だけで、あるいは担任だけで抱えてしまうと長期的な支援が困難になることは明らかである。そこで、文部科学省が外国につながりのある児童生徒の学習を支援するために開設した情報検索サイト「かすたねっと」を紹介した。児童生徒向けには多言語対応の教材・資料があり、保護者向けには多言語対応の文書があるので学校からのお知らせなどをする際に利用できる。研修の中では実際にサイトを見ながら紹介しすぐに使えるということを実感してもらえた。

【第 3 回】	
事前課題	1. 文部科学省＞外国につながる子供向けの教材が知りたい！ ※サイト内を閲覧しておいてください。 https://www.mext.go.jp/a_menu/ikusei/gakusyushien/mext_00663.html 2. ハーモニカ ※サイト内を閲覧しておいてください。 http://harmonica-cld.com/jp 3. 小学校または中学校の教科を1つ選び、その中で学ぶ単元を1つ思い浮かべてください。その際使われる日本語に、どんな特徴があるか考えてください。
研修内容	1. 教科学習につなげる日本語指導 ・事前課題のサイトを見て、気づいたこと、気になったことを話してください。 ・「おしゃべりはできる」が「勉強についていけない」のはなぜでしょう。教科学習が難しい理由を考えてください。 2. 漢字指導の方法と留意点 ・小学校高学年で来日した非漢字圏の子どもは、どのように漢字を学んでいくとよいでしょうか。 ・漢字圏の子どもにとっての難しさについて考えてみましょう。 ・教科学習につなげるためには、どのように漢字指導を行うとよいでしょうか。 3. 学習単元ごとの日本語の特徴 ・小学校または中学校の教科を１つ選び、その中で学ぶ単元を１つ思い浮かべてください。その際使われる日本語に、どんな特徴があるか考えてください。
紹介した書籍	『JSL 中学高校生のための教科につなげる学習語彙・漢字ドリル』樋口万喜子編（ココ出版） 『外国人生徒のための教科につなげる日本語　基礎編』有本昌代著（スリーエーネットワーク） 『ちがいがわかる対照表日本の漢字　中国の漢字』伊奈垣圭映著（宝友書房）

〈感想の集計〉

「子どもの日本語指導オンライン研修」第３回　感想（4名）		
No.	選択肢	回答数
1	**質問：教科学習につなげる日本語指導について**	
	知らないことが多かったが、知るきっかけになった	3
	少し知ってはいたが、より考えるきっかけになった	1
	よく知っているつもりだったが、さらに考えたいと思った	0
	よく知っていたので、特に新たな発見はなかった	0
2	**質問：漢字指導について**	
	知らないことが多かったが、知るきっかけになった	3
	少し知ってはいたが、より考えるきっかけになった	1
	よく知っているつもりだったが、さらに考えたいと思った	0
	よく知っていたので、特に新たな発見はなかった	0
3	**質問：学習単元ごとの日本語の特徴について**	
	知らないことが多かったが、知るきっかけになった	3
	少し知ってはいたが、より考えるきっかけになった	1
	よく知っているつもりだったが、さらに考えたいと思った	0
	よく知っていたので、特に新たな発見はなかった	0
4	**質問：全３回分の事前課題のサイトについて**	
	ほとんど知らなかったので、参考になった	4
	少し知っているだけだったが、これから活用してみたいと思った	0
	よく知っているつもりだったが、さらに新たな発見があった	0
	よく知っていたので、特に新たな発見はなかった	0
5	**質問：全３回（６時間）の長さについて**	
	長くて大変だった	0
	長かったが、十分だった	1
	ちょうどよかった	3
	もう少し長くてもよかった	0

2020/12/22 現在

〈受講者の声〉

・実例や経験されたこと、どうやって対処されたのか、どうすればいいのかを具体的に示してもらえたことはよかった。

・子どもたちが在籍学級の教科の授業につまずかないように、出来れば積極的に授業参加できるように支援してあげたいと考えている。そのためには週に 1、2 時間の限られた時間の中で何ができるかが課題である。最近は担任ともある程度人間関係も出来てきたので、学級に戻ったときにつまずきを少しでも軽減してあげられるように、学習の進度を把握しながら学級の学習

内容の一歩先を予習するようにしている。ただ、これがこの子にとって日本語支援になっているのか心もとないと思うことがある。

・日本語指導の担当教員を配置してほしいとお願いするためには、どこにどう働きかけていけばよいのか。他県ではどのようにして日本語を通級指導教室で教えられるようになったのか。というようなことの、実例を学びたいです。

第3回目の研修は1回目、2回目の研修を踏まえ、教科学習につなげる日本語指導をメインに実施した。「おしゃべりはできるが、勉強についていけない」というのはどういうことなのか、非漢字圏、漢字圏のJSL児童生徒に漢字指導を行う方法、母国との生活習慣や環境の違いが学習にどう関係するかなど、日本語支援の中でも専門的な知識が必要な事例を取り上げた。事前課題として紹介した「ハーモニカ」はCLD児[9]への言語支援のためのサイトであるが、第1回から資料「外国ルーツの年少者への日本語指導について【事前調査事項】」（平田・當房 2019）をもとに「母語の確立」の重要性を取り上げており、JSL児童生徒という視点にとどまらず、多文化多言語環境に育つ子どもの存在と、母語の確立が不安定なことによる学習言語能力の獲得の難しさについても意識が向けられるように促した。

JSL児童生徒が、日本語が分からないことで「発達障害ではないか」と疑われることがある。教室の中で先生や友達の言っていることが分からないとキョロキョロするというのは、子どもであれば普通の反応ではないだろうか。日本の文化的なことがわからないため理解がずれてしまうと、そんなことも知らないのはおかしいと誤解されることもある。このようなことが起こらないためにも、学習に必要なことをどれくらい知っているか事前にチェックしておくとよいのではないだろうかという提案を行った。

4. まとめ

（ア）本研修情報収集

（1）参加した受講者がどこから情報を得て本研修を知ることになったのかについて記す。当初は下関市内在住者向けに考えた講座であったが、SNS等を通じて県内の広範囲と県外（大阪府）にまで知られることになった。幸いオンライン講座であったため、各地域の受講者と容易につながることができ情報交換等も行えた。

【本研修をどこで知ったか】　（回答数：１６名）※聞き取りによる回答
●講師から直接：８（下関市：５、山陽小野田市：１、山口市：２）
●山口県国際交流協会Twitter：２（山口市：１、大阪府：１）
●山口県国際交流協会メール：５（山口市：1、光市：1、周南市：1、防府市：1、萩市：1）
●下関子どもの日本語教育支援研究会Facebook：１（下関市）

実施にあたってはDLAをはじめとした文科省の資料や日本語教材の情報など、事前課題として紹介したサイトにアクセスできるITリテラシーを持っていることが、本研修を受講する上で必要であった。しかし、受講希望者にそれが備わっているとは言い難く、オンラインでの実施を断念し対面での「出前講座」を実施したケースもあった。外国ルーツの子どもの日本語指導にはネット上の情報が豊富であることや、本市のように外国人散在地域ではオンラインでの支援も今後の視野に入れることなどを考えると、指導者・支援者がITリテラシーを身につけておくことも重要となる。

（イ）各研修会からの知見

【第１回】

①山口県内の現状として、日本語指導が必要な児童生徒が入学・転入してきた場合に、学校はまず、当該児童生徒の母語のできる通訳を募ろうとするケースが多いことがわかった。

②保育士や小学校教員は、普段から児童に対しわかりやすい話し方をしているため、「やさしい日本語」は理解しやすいようであったが、外国人保護者に対してとなると、つい「丁寧に話さなければ」と敬語を使ってしまうとのことで、「やさしい日本語」を意識してもらう重要性を伝える必要があると考える。

③DLAは、県内の学校教員にはまだあまり知られていなかったことが大変残念であったが、比較的馴染みのある知能検査に用いられるWISC検査と比較すると理解されやすい可能性が見いだせた。

④県内ではDLAについての知識のある指導者・支援者が少なく、実施できている可能性が大変低いことが窺えた。多少の知識を持っていても、実施の経験を持たない受講者が多く、初めての「実施者体験」で、実施の難しさと同時にDLAで測ることのできる内容の重要性を実感してもらえたことは有意義であったと考える。しかし、オンライン研修の中の30分程度では十分とは言えず、また、DLA全体を実施し診断を行う力を身につけるためには経験も必要となることを考慮すると、下関市のみならず山口県各所でのDLA実施者養成の研修の必要性がある。

【第２回】

①子どもの日本語の初期指導のイメージとして、日本語教師有資格者やボランティア教室経験者は成人を対象とした教え方同様に「あいさつ」や「自己紹介」から指導することを考え、学校教員は文字指導から行おうとする考えを持つ傾向があることが改めて確認できた。子どもの場合は、自らの健康と安全を保つために必要な緊急性の高い表現から身につけさせることが大切だということの理解のため、初期指導についての研修は十分に行う必要がある。

②日本語指導にあたったことのある指導者も、「どのような教材があるのかわからない」「適切な指導のためにどの教材を選ぶとよいのか悩む」「自分の指導法が果たして適切であるのか自信がない」といった悩みや不安を抱えていたことがわかった。この点は、関係者、経験者が集まり情報交換、共有がされるだけで、解決、解消される可能性もあるが、そこには日本語教育の専門家が関わりアドバイスを行うことも重要である。多くの情報が持ち寄られるだけでなく選別できることで、よりよい指導・支援が自信を持って行えるようになり、ひいては、子どもたちの日本語力を伸ばし学習面の困難を取り払うことにつながると考える。

【第３回】

①ボランティア教室で成人の日本語学習者に指導経験のある場合でも、漢字指導は自主学習に任せる考えの人もおり、その場合、外国ルーツの子どもに対する漢字指導も難しいという印象を持つようであった。学校での学習がその後の成長や人生に大きく影響する児童生徒にとって、学年相応の漢字学習は避けて通れないことを指導者・支援者が理解し、どのような指導法が適切で効果的であるかを学べる研修を行う必要がある。そのためにも、今後は教材開発も同時に進めていくことを考えたい。

②CLD児について説明すると、「そういえばそんな子も在籍している。普段のおしゃべりには問題ないが、学習についていくことが特に難しい。そんな子どもにも日本語指導が必要になるのか」といった気づきを聞くことができた。もちろん、学習についていくことが難しい要因は様々であり一概には言えないが、家庭での言語環境にも目を向けてもらうことで、必要な支援について考えることが可能になる。

③県内では、日本語指導にあたる教員はいても１人であることが多く、本研修で限られた情報の中、１人で悩みを抱えていたり指導に迷っていたりする当事者たちの声を聞くことができた。子どもの日本語指導・支援に関わる人材が少ない県内の状況を考えると、その数少ない人材をつなぎ、情報交換などできる環境づくりが求められていることを実感した。

（ウ）検証ならびに結論

（1）外国語として日本語を教える日本語教員は、成人に対する指導経験はあっても、子どもに

教えたことのある者は少ない。子どもの日本語指導だから日本人ならできる、小中学校の先生ならきっとできる、日本語教員ならもちろんできる、というのは誤解である。

(2)「JSL児童生徒のための日本語指導・支援」という専門分野があっても不思議ではないくらい、子どもの日本語指導・支援には言語習得についての専門知識と経験が必要だ。その点では、本研修の内容は日本語指導の中でもかなり専門的な部分を多く取り入れていたことになる。本研修の受講者はJSL児童生徒に支援を行ったことがある経験者がほとんどであったため、研修がスムーズに行えた。受講者からの質問も「DLAを行う際に、受ける子どもに対して（そのテストについて）どのように説明をしますか。」「DLAのカードは本人に選ばせますか。」など具体的なものだった。

(3) 現在JSL児童生徒に日本語指導を行っている受講者からは公的な日本語指導に関する研修がなく手探り状態であること、1人の児童に関わる時間がわずか（週に1，2時間）であることなど適切な指導や支援をしたくてもできないという悲痛な声もあった。

(4)「外国にルーツをもつ子どもを指導する場合、家庭との関係を切り離すわけにはいかない。家庭の文化、言語環境がいろいろな形で子どもの日本語能力の形成に関係してくることも学んだ」という気づきも見られた。

(5) これらのことをまとめると本研修はJSL児童生徒の日本語指導・支援に役立てられる可能性があると考えられる。

5. おわりに

下関地域で児童生徒の日本語支援として「夏休み日本語教室」を始めたのが2016年のことである。当初集まった子どもは5名にも満たなかった。支援が必要な子どもはもっといるはずだと思い、翌年は教育委員会を訪ね「夏休み日本語教室」の開催を市内の小中学校へ周知していただくよう依頼した。ところがその年も3名しか集まらなかった。様々な理由により参加したくてもできない子どももいたが、支援を受けたいと思っている子どもに、この教室の知らせが届いていなかったということが後になってわかった。もし、この子どもが他の地域にいたら適切な日本語支援を受けられたのかもしれないと思うと、日本語教育に携わる者として責任と、その子どもの存在に気づいてあげられなかったことを申し訳なく思った。当時小学生だった子どもたちは中学生になり、高校受験を目前にしている。しかし、山口県の県立高校では全日制、定時制のどちらも外国人生徒への高校入試特別措置は一切なく、日本人と同じ状況下で受験をしなければならない。

生活者としての外国人が増えていけば、大人だけでなく子どもに対しても日本語教育は必要になり、教える人材も必要になる。今回、広報としてご協力いただいた山口県国際交流協会をはじ

め、市や県の教育委員会にもさらに働きかけ、指導者･支援者のネットワークづくりに努めたい。

尚、2020 年 12 月 23 日現在、本研修は継続中である。（2021 年 2 月末日研修終了）

注

1. JSL はJapanese as a second language の略。（第二言語としての日本語）
   JSL 児童生徒とは、日本語を第二言語とする児童生徒を指す。本稿では小学校、中学校に通っている子どものことを指す。
2. 「日本語指導」とは 2014 年に導入された「特別の教育課程」を踏まえた日本語指導を指す。「日本語支援」とは教科学習参加のために日本語能力等に応じた個別対応した支援を指す。
3. 平田歩・當房詠子（2017）「下関市における外国にルーツを持つ子どもたちへの日本語支援について 夏休み日本語教室の役割と意義」『論集』第 50 号　梅光学院大学
4. 文部科学省「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査（平成 30 年度）」の結果について
   https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/31/09/1421569.htm
5. 本稿では、両親または一方の親が外国出身者である子どものことを指す。
6. 4. と同じ
7. 日本で生活している外国人の方が公文書などを「易しく」理解できるように、「優しい」気持ちで書き換えた日本語。（庵　功雄　やさしい日本語HP より）
   http://www4414uj.sakura.ne.jp/Yasanichi/what-is-ej.html
8. 対話型アセスメント（略称「DLA」：Dialogic Language Assessment）
9. 文化的・言語的に多様な背景を持つ児童（Culturally Linguistically Diverse Children）を指す。

〈参考文献・資料〉

バトラー後藤裕子（2011）『学習言語とは何か』三省堂

文化審議会国語分科会（2019）『日本語教育人材の養成・研修の在り方について（報告）改訂版』文化庁

南野奈津子（2020）『いっしょに考える外国人支援』明石書店

金　春喜（2020）『「発達障害」とされる外国人の子どもたち』明石書店

毎日新聞取材班（2020）『にほんできる』明石書店

平田歩・當房詠子（2017）「下関市における外国にルーツを持つ子どもたちへの日本語支援について 夏休み日本語教室の役割と意義」『論集』第 50 号　梅光学院大学

文部科学省（2019）「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査（平成 30 年度）」の結果について
https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/31/09/1421569.htm